

# キュー王立植物園で「フローラヤポニカ」展を見学して

田中 純子

(練馬区立牧野記念庭園記念館学芸員)

## Visit for FLORA JAPONICA at Royal Botanic Gardens Kew

TANAKA Junko

イギリスのキュー王立植物園(以下、キュー植物園)内にあるシャーリー・シャーウッド・ギャラリーにて、「フローラヤポニカ」展が開催されている(会期は2016年9月17日～2017年3月5日まで)。筆者はアーティストとともにロンドンへ飛び、9月28日に行われたレセプションに参加した。筆者が勤務する練馬区立牧野記念庭園記念館(以下、記念館)も、明治前期に制作された植物画を出品しているからである。本稿では、この展覧会について報告する。



図1 シャーリー・シャーウッド・ギャラリー

展示会場となったシャーリー・シャーウッド・ギャラリーは、エントランスホールの外観がガラス張りで、直線的なデザインの建物である(図1)。会場は、広い空間を備えた展示室(図2)と、その壁に沿った細長い廊下のような展示室(図3)とからなる。前者の展示室



図2 展示会場1



図3 展示会場2

を飾ったのは、現在日本を代表するボタニカル・アーティストによる、日本に自生する植物を描いた作品である。後者では、江戸時代以降に制作された植物画や植物図鑑などが展示され、さらに奥の展示室では、シャーリー・シャーウッド・コレクションとなった日本のアーティストの作品やキュー植物園の公式画家の作品が並べられた。このように本展は、質量ともに非常に充実した展覧会である。

日本から出品されたアーティストは35名。一人につき1点から数点の出品で、総数は約80点。このうち20点余りはキュー植物園の図書館で展示され、さらにいくつかの作品は、11月2日から約1カ月間ロンドンの日本大使館を飾った。その際に、大使館内のロビーで、東日本大震災の津波に耐えて1本だけ残った陸前高田の「奇跡の一本松」(アイマツ)を描いた山中麻須美氏の作品が一般公開された。キュー植物園の公式画家である山中氏は、2015年にKew's "treasured trees" というタイトルで、同園内にある貴重な樹木を描画した作品展を同ギャラリーで開かれた。そして、日本の植物画家による展覧会を同じ会場でぜひ行いたいという夢を抱き、本展を企画、開催準備において中心的な役割を果たされた。「フローラヤポニカ」展の図録を担当されたのも山中氏である。この図録は、出品作品の図版の美しさは言うまでもなく、専門家による論文や個々の植物の解説が掲載され、植物の特徴や人との関わりの歴史について理解できる、内容の濃いものとなっている(図4、図5、図6)。また、日本にあって作品のとりまとめなど大事な進行役を務められたのが、石川美枝子氏と小西美恵子氏であった。記念館が本展に参加できたのは石川氏のご尽力によるところが大きい。

本展において、図版の表紙を飾るイロハモミジ、オオヤマザクラ、ノダフジなど四季折々に私たちが楽しむ植物や、ヒロハカツラ、ウナズキギボウシ、キバナウツギなど日本に固有な植物を描いた作品を見ていると、日本の植物相の豊かさ、アジア本土では見られない日本独自の植物の存在に気付かせてくれる。それが本展のねらいであると同時に、展示された植物画を通して、ヨーロッパやアメリカにおける園芸品種の発展に日本の植物が大いに寄与したことを知ってもらいたいという企図も読み取れる。アジサイ・ツツジ・ツバキ・ユリなどがそうした植物で、これらの植物は19世紀中頃に日本から

ヨーロッパに渡りそこで普及し、様々な園芸品種が生まれたのである。



図4 表紙



図5 裏表紙



図6 見開き

さらに、本展ではもう一つのねらいがあった。それは、先に述べたように、第二次世界大戦前につくられた植物画や植物学の著書などを展示することで、日本における植物画の歴史あるいは植物学の発展を理解できるようにしたことである。例を挙げると、江戸後期を代表する本草学者岩崎灌園(1786 - 1842)の『本草図譜』、明治時代の服部雪斎(1807 - 没年不詳)や加藤竹斎(1818 - 没年不詳)の描いた植物画などが出品された。これらの資料は、キュー植物園の図書室が所蔵するものと、日本の公立の研究機関が本企画展に協力して出品したものからなる。近年話題となった、竹斎制作の「扁額」も展示された。これは、材をキャンパスにしてその材の植物を描いた、珍し

いものである。殊に、キュー植物園所蔵のイチヨウの「扁額」と東京大学大学院理学系研究科附属植物園（小石川植物園）所蔵の竹斎によるイチヨウの図とが並べられたことは、両者の比較ができ制作過程が推測されるものであった。記念館保管の服部雪斎の植物画は、はじめて海外でまとまって展示されたのではないだろうか。さらに、日本で戦後ボタニカルアートが花開いていく、その原点ともいえる、植物学者牧野富太郎（1862 - 1957）が描いた植物図（高知県立牧野植物園蔵）も展示された。日本人がいかに植物について関心を持ち記録しそれを後世に伝えたかという、日本人と植物との密接な関わりを辿ることができる展示内容を本展に加えた意義は大きい。

アーティストによる作品を一点一点鑑賞しながら、描く対象となる植物をどこでいつ採集したかという、キャプションの記録に目が留まった。希少な植物を入手するための苦勞、開花の時期や実のなる頃など生育のそれぞれの段階を描くために何度も足を運ぶ労力はいかばかりであろうか。さらにそれを描画していくときの努力と忍耐はなおさらのことと思う。一方で、植物と向き合うなかで、意外な発見があったり、植物の美しさや営みのすばらしさに心奪われるときがあったりして最高の喜びを味わうことも多々あるであろう。私は、そうした至福のときをアーティストと共有しながら過ごせたことに感謝したい。

最後になるが、11月5・6日に恵泉女学園大学の大学祭にて、「フローラヤポニカ」展に出品された角田葉子氏のボタニカルアート展が行われた。『園芸文化』の表紙を飾る角田氏の植物画の原画とともに、ベトナムの黄色いツバキを描いた作品が展示された。日本では見られないツバキの色に目を奪われるのみならず、花や葉の形態を示した構図がすばらしく、日本のツバキとの違いが印象に残った。

また、石川美枝子氏は、ボルネオ島でドングリ、ラフレシアやネペンテス属の植物を描くことに精力的に取り組んでおられる。世界各地の貴重な植物を記録に残す活動は、環境が加速度的に変わる現在では非常に重要なことであり、また、その地域に暮らす人々に記録する意義を理解してもらうことも必要性を増しているであろう。この度イギリスで開催されたフローラヤポニカ展を見学して、日本のアーティストの国内外の活躍が、ますますボタニ

カルアートを通じて世界をつなぐ大きな原動力になっていると確信した。

## 謝辞

拙稿執筆にあたり、石川美枝子氏にご助言及び写真提供のご協力をいただきました。ここに感謝の意を表します。

## 参考文献

- ・ *FLORA JAPONICA*, Kew Royal Botanic Gardens, 2016.
- ・ Maria Devaney, *Treasures of Japan*, Kew Royal Botanic Gardens Magazine, 2016 Autumn.
- ・ Robin Lane Fox, *London's Kew celebrates the plants and botanical artists of Japan*, FINANCIAL TIMES, 2016
- ・ 長田敏行「明治11年からの贈り物！」『小石川植物園後援会ニュースレター』41号(2011年6月)